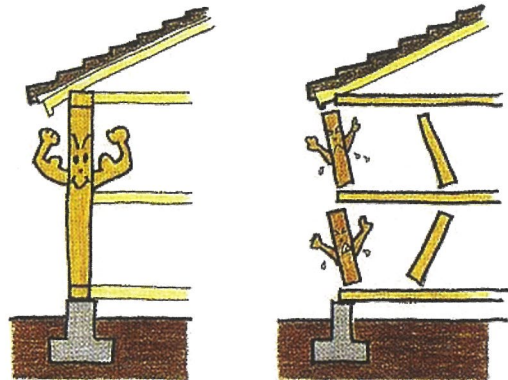
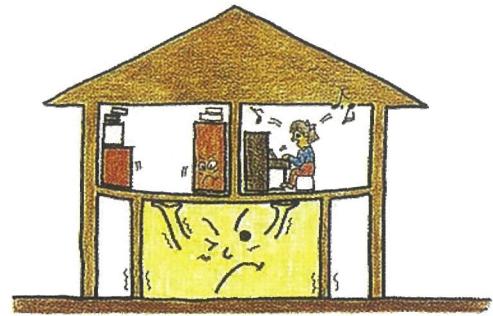


6 柱の太さ・配置

柱は、屋根や2階の床の重さを支え、土台や基礎に力を伝える大事な部材です。屋根の重さ、柱間隔等によって必要な太さが異なりますので、基準に合った太さの部材を使いましょう。

上階と下階で柱の位置がずれていると荷重が十分に伝わりません。柱にかかる荷重が均等になるように、平面的にもバランスよく配置し、上階、下階ともなるべく同じ位置に設けましょう。

また、建物の四隅の柱は通し柱にしてください。

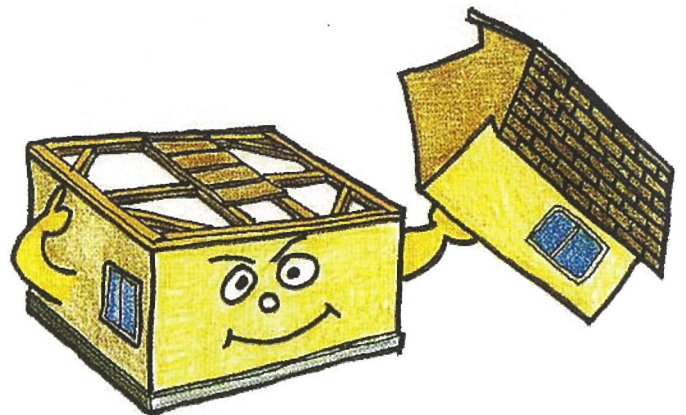


7 床組

床組の四隅には火打ち材（梁）を入れて、全体が歪まないようにしましょう。

床下地材として構造用合板等を張りつめると、建物を固めるのに大きな効果があります。

1辺が4m（2間）を超える大きな吹き抜けは、2階の床に大きな穴をあけることとなりますので、耐震上好ましくありません。



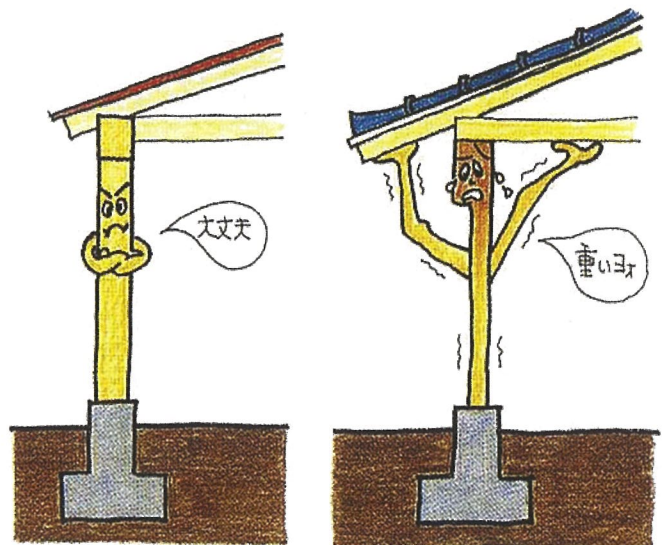
8 屋根・重さ

建物を耐震的にするには、建物の荷重を軽くすることが有効です。2階より平屋、重い屋根より軽い屋根の方が有利です。

特に木造住宅では、建物全体の重量のなかで屋根の重量のウエイトが高いため、鉄板葺きやスレート葺き等軽い屋根を使用する方が地震に対しては有利です。

阪神・淡路大震災では、瓦葺き屋根の被害が目立ちましたが、瓦葺き屋根には他の屋根材にない、優れた点（遮音、断熱、耐久性や見ばえ等）が多く、耐風性にも優れています。

瓦葺き屋根を選ぶ場合は、瓦を下地材にしっかりとめるとともに、壁を多くし、柱や梁を瓦の重量に耐えられるように太く、強くすることが大切です。



9 基礎と土台

基礎は、建物全体を支え、建物に作用する荷重を安全に地盤に伝え、地盤の沈下、変形に対して建物を安全に保つための役目があります。

ブロックや玉石の基礎は、地震のとき不同沈下したり、土台がずれたり、建物全体が回転したりするので好ましくありません。

1階外周壁と内部の主な間仕切り壁の下には、全体が連続した鉄筋コンクリート造の布基礎を設けてください。

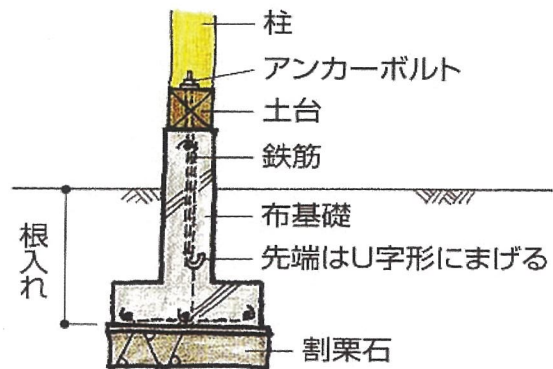
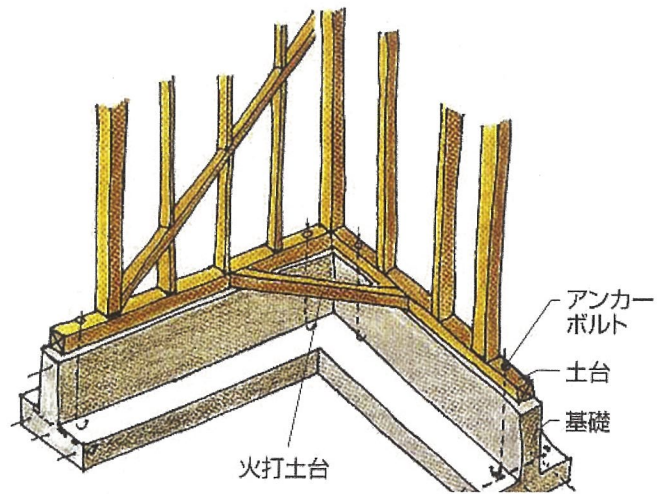
基礎の根入れは十分にとり、底面は沈下を防ぐために広くとりましょう。

また、べた基礎（底面全体を鉄筋コンクリート造で造った基礎）にすると布基礎に比べ更に有効です。

土台は、基礎の上であって、柱から伝えられる上部の荷重を基礎に分散して伝える部材です。

地震の揺れで、建物が浮き上がったり、基礎からずれて落ちるのを防ぐために、アンカーボルトで基礎にしっかり連結します。

特に、土台端部や、継ぎ手付近には必ず設けましょう。



10 防腐・防蟻

構造材の腐れや白アリの被害は耐久性を損ね、地震時に折れたり、落ちたりして、被害を大きくする恐れがあります。

木材は乾燥していると腐食しにくく、蟻害も少なくなりますので、床下、小屋裏、天井裏、壁内部の通気をよくし、漏水や雨漏りがないようにしましょう。

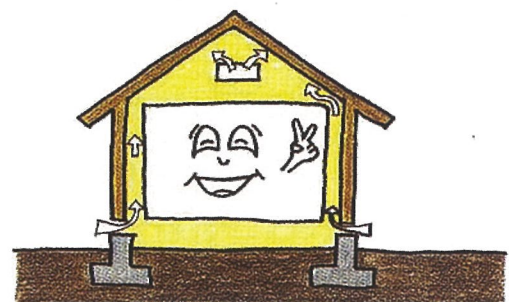
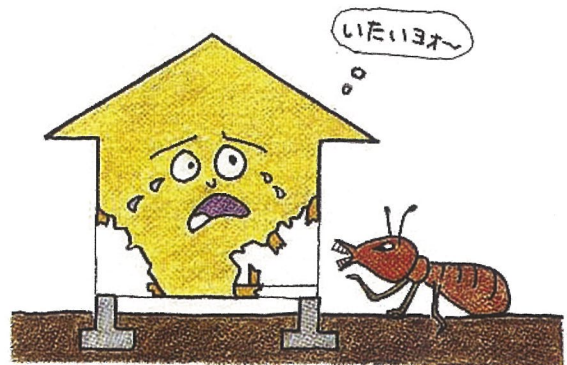
土台は、腐食や白アリの被害を受けやすいので、耐久性の高いヒノキやヒバなどの材料を使用し、防腐・防蟻処理しましょう。

土台以外でも、構造上主要な部材である柱、筋かい等で地盤面からの高さが1m以内の部分にも、防腐・防蟻処理を施しましょう。

日当たりや通風が悪く、風雨のあたりやすい場所は、腐りやすいので注意しましょう。

雨漏りや漏水がないようにし、雨樋等が破損したらなるべく早く修繕しましょう。

台所、浴室、便所などの水回りは、特に換気や防腐に注意しましょう。



- ◆床下部分には壁の長さ5m以内ごとに面積300cm²以上の換気口を設けます。
- ◆土台・床組は基礎のせいを高くして、地盤からの吸湿を防ぎます。
- ◆小屋裏換気のため、有効な小屋裏換気口を設けます。